

◆江古田
(東京都練馬区)

読売新聞記者 中西 茂

東京・池袋から西武池袋線の各駅停車で三つ目。江古田は、映画「Shall We ダンス？」の主人公役所広司が、ホームからダンス教室の草刈民代を見初めた駅だ。周辺には、日本大学芸術学部、武蔵大学、武蔵野音楽大学がある。音大近くには、けんばん亭という店があるし、駅からの道沿いには、ハーモニーやピオラといった名のアパートやどれみふあ緑地という小公園もある。街を歩くと、大きな楽器を抱えた学生に出くわし、あちこちから楽器の音も聞こえてくる。

江古田で七〇年以上の歴史を刻んできた三校だけに、街と大学の関係は濃い。今年も一〇月には、日芸と武蔵野音大の学生たちが仮装をして商店街を歩き、それぞれの学園祭をPRした。かつては三校ともパレードした時期もあるという。

とりわけ北口の栄町本通り商店街振興組合(江古田ゆうゆうロード)では七、八年ほど前から、隔月一回、土曜日にかかれるナイトバザールを、学生たちが手伝っている。

お茶屋を営む理事長の秋山隆幸さん(六八)によると、日芸の演劇学科の学生たちが、学内イベントのPRを商店街でさせてほしいと言ってきたことがきっかけだったという。

武蔵野音大の仮装行列が、グループごとに、その仮装ぶりをアピールするのも、ゆうゆうロードの信用金庫前。

設置された大型テレビからは地元の店舗のCMが流れる。このCMは日芸の映画学科の学生たちの作品だ。

江古田駅の北口は大規模店が進出していないため、昔ながらの「江古田市場」も残る。日芸では、写真学科報道写真クラスの三、四年生一六人が市場の人やモノを撮り、十一月の学園祭(芸術祭)で写真展を開いた。十二月いっぱい、少し風変わりな方法で、市場でも作品を展示する。日芸ではずっと校舎の建て替え工事が続いていたため、芸術祭が江古田で開かれるのは五年ぶりだ。そんなこともあ



武蔵野音大生が仮装ぶりをアピール



「芸術祭」での「江古田市場」の写真展

って地元を目を向けよう
ということになったとい
う。

三年生の酒井成美さん
は、「普段はあまり利用
することがなかったが、
今回の撮影で市場を歩
き、お店の方から『この
看板は、日芸の学生さん
に描いてもらったのよ』
といった話をたくさん聞
きました」。やはり、学生が街に出ること得るものは大
きい。「書を捨てよ、町に出よう」なのだ。

バリケード闘争の時代の一九六八年に入学した芸術学部
次長（教授）の宮澤誠一さん（六一）は、この街の生き字
引のようだ。宮澤さんが地主から聞いた話では、「江古田
は昔から芸人の街」。「昭和三〇年代、地主自身が売れない
芸人を何人も住まわせていた」というから、街と芸との関
係も歴史が長いようだ。

一九七八年作の「江古田スケッチ」（竹内縁郎作詞、岡
野光矢作曲）という曲があつて、ユーチューブで聞けると
いう。さっそく聞いてみると、一九七〇年代から八〇年代

にかけて学生生活を送ったフォーク世代がノスタルジーに
浸れる曲だった。「日芸 武蔵 武蔵野音大 思い出の街」
というリフレインが印象的だ。宮澤さんと同世代の竹内さ
んは、現在、朝倉薫演劇団を主宰する作家・演出家である。
江古田にはライブハウスらしき店も何軒かあるが、今年
三月の開店で、定期的にライブも行われるダイニングバー
を、新しくなった日芸の目の前で見つけた。「リングラッ
イオ」（イタリア語で「感謝」という一〇坪ほどの地下の
店だ。店内にはグランドピアノとDJブースがある。どう
やってピアノを持ち込んだか店で聞いてみるといい。

ご主人の中川和雄さん（四一）は元DJ、妻の三村英利
子さんは武蔵野音大出身のソプラノ歌手。曜日によって、
クラシックからディスコ音楽
まで、さまざまな音楽が楽し
める。学生たちが飛び入りで
ピアノをひくようなこともあ
るといふ。中川さんは、「音
楽に限らず、自由にパフォー
マンスできる店にしたい」と
いう。何年後には、学生街
の新たな名所になっているか
もしれない。



グランドピアノがあり、ライブも開か
れる「リングラッイオ」